

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ

黒田 禎一郎

2021年8月1日(日)

主 題：「みことばの光に目を留めよう」

—祝福の人生—

テキスト：2ペテロの手紙1章19～21節

### はじめに

- ・ただ今、「東京オリンピック2020」が開催中です。  
世界のトップアスリートたちが集まりました。コロナ禍で多くの制限の下でのオリンピック、歴史に残る前代未聞のオリンピックとなりました。
- ・今回のオリンピックが始まる前のことでしたが、大臣の発言が大きな問題となったことがありました。
  - ① 西村経済再生担当大臣は「お酒」の問題で、発言内容の撤回をしました。
  - ② 菅首相は今回のオリンピックを「コロナに打ち勝つオリンピックとしたい」と述べられました。
- ・これに対して野党からは、痛烈な批判が浴びせられましたね。それは言葉の問題で、前者はお酒の販売業者からの強い反発が出て発言撤回となりました。後者は、希望のようにコロナに打ち勝てない現実から、批判の声が出ました。言葉というものは本当に難しいものですね。
- ・大臣たちの発言は国の方向を左右するだけに、一般人とは違い重いものです。したがって、言葉の軽さはいつも問題を引き起こしてしまいます。人はそれなりに、一生懸命に言葉を選び語ってはいますが、軽く語る言葉は問題となります。
- ・「ことば」に対する慎重さということは、聖書の最も大切な教えの一つです。「ことば」について聖書は教えていますが、その一部を引用しましょう。  
伝道者の書5章
  - 5:2 神の前では、軽々しく心焦ってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。
  - 5:3 仕事が多ければ夢を見、ことばが多ければ愚かな者の声となる。
  - 5:7 夢が多く、ことばの多いところには空しさがある。ただ、神を恐れよ。
- ・神のことばは、誠実です。その人が、神を恐れている人であるか否かは、その人の言葉の内に表れるものです。素晴らしいことは、神はご自身のことばに対して、どこまでも誠実なお方であることです。そして語られたことを必ず成し遂げられることです。

- ですから、この神を信じる者には、言葉に慎重さが大切です。また誠実であることも期待されます。聖書の神は、「ことば」はご自身を現しておられます。ですから、神の「ことば」は誠実であり、永遠に変わる事のない確かなものがあります。聖書は次のように述べています。

#### 1 ペテロの手紙 1 章

- 1:24 人はみな草のよう。その栄えはみな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。
- 1:25 しかし、主のことばは永遠に立つ」とあるからです。これが、あなたがたに福音として宣べ伝えられたことばです。
- では、私たちは「ことば」である神をどのように知ることができるでしょうか。今日は次の3点から考えたいと思います。

### 大切なポイント

#### 1. 歴史の中で生きておられる神を知ること

- 天地を創造された神は、歴史の中に生きて実在されます。そして神のご性質は、神が選ばれた民イスラエルの歴史の中で現されてきました。神はご自身の愛する民イスラエルと、何度も契約を結ばれました。神は、父祖アブラハムに次のように語られました。

#### 創世記 17 章

17:1 さて、アブラムが九十九歳のとき、主はアブラムに現れ、こう言われた。「わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。

17:2 わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に立てる。わたしは、あなたを大いに増やす。」

17:3 アブラムはひれ伏した。神は彼にこう告げられた。

- ところがイスラエルは、何度も神との契約を踏みにじり、神に背を向け続けました。しかしそれでも、神はご自身の契約のことばに対して、どこまでも誠実であり続けようとされました。 イザヤ書 54 章

54:10 たとえ山が移り、丘が動いても、わたしの真実の愛はあなたから移らず、わたしの平和の契約は動かない。——あなたをあわれむ方、主は言われる。

- イエス・キリストの十字架の福音を初めて聞いた方々の中には、「ただ信じるだけで救われる」という「ことば」は、なかなか理解できません。そんな簡単なことで、果たして人は救われるのだろうかと思います。そうです。そんな簡単なことではありません。それは、ただ神の愛であり、恵みにすぎません。

- ・神の救いはご自分のことばに対する、誠実さと、私たちが救おうとされる熱い情熱と、想像を超えるほどの愛と、そして忍耐に基づいているのです。
- ・神を恐れ敬う人は、神がご自分のことばに誠実であり、真実であられるように、自分自身もことばに誠実であり、真実であるべきです。今の時代、とくに SNS を通して「フェイク・ニュース」が飛び交う時代であるだけに、言葉の重みを覚える必要があります。
- ・私たちは確かなみことばにしっかりと目を留めて、確かな歩みをさせていただきたいと願います。神は歴史の中に生きて働かれるお方です。
- ・では、どのようにして生きておられる神を知ることができるのでしょうか？それは、聖書のみことばによってです。歴史を通して、神が生きておられることを知ることができます。

## 2. 神のみことばに目を留めること

1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

### 1) しっかりと見続けなさい

- ・「明けの明星」とは、夜明け前にひときわ輝く金星のことを指します。神のみことばは、今日も暗い世を照らす光です。やがて、イエス・キリストが来られる日まで、私たちを導き続けます。
- ・かつてイスラエルの民が出エジプトし、約束の地カナンへ向かう途中、神は昼は雲の柱、夜は火の柱として先導されました。同じように、神は聖書のみことばを通して、聖霊の助けによって私たちの前に立ち、お導きくださるお方です。
- ・「それに目を留めているとよいのです。」とは、原典では「しっかりと見つめていなさい。」です。このフレーズは継続性を表す大切なことばです。ですから、「しっかりと見つめ続けていなさい。」と勧められています。

- ・なぜ、「しっかりと見つめ続けること」が大切でしょうか？

#### ① みことばは信仰の確信を与えるからです。

私たちの信仰が、単に自分の経験にだけ基づいたものであるなら、それは不確かなものと言えましょう。記憶が薄れることもありますし、また別の視点から再解釈することもあるからです。次に起こる経験によって、前の経験が否定されることも起こります。そして自分の信仰を疑うようなこともあります。

- ・皆さん！ 経験は大切です。しかし、私たちの信仰はそれだけに基づいているわけではありません。確かな、そして変わる事のない神のことばによって。根拠づけられ、支えられ続けていかなければならないのです。

## ② みことばは希望の光であるからです

- ・ペテロは、私たちを取り巻いているのは闇であって、もしそこにみことばの光が照らされなければ、私たちはどこにも希望を見出すことはできません。しかし私たちは、すぐ目を逸らしてしまいます。目を逸らすならば、どこにも希望が見出せないことを知っているはずなのに、目を逸らしてしまうのです。
- ・それが罪の恐ろしさです。罪は人の心の目を塞ぎ、現実を見え難くしてしまいます。自分がどこにいるのか、いったい自分はどこへ進もうとしているのか、分からなくさせてしまいます。さらに悪い場合は、それを考えること自体、あきらめさせてしまうのです。その結果、その場限りの生きた方へ、刹那的の生き方へ人を追いやってしまいます。
- ・あのアダムとエバの物語を思い出してください。  
「神は本当にそう言ったのですか」と、悪魔は先ず神のことばに対する信頼を揺り動かそうと謀りました。エバは、悪魔の誘惑の言葉に乗ってしまいました。自分の目の前にある、いかにも慕わしい木の実を見つめているうちに、神のみことばに対する確信を失ってしまいました。(創世記3章)
- ・ここに闇の中を歩む聖徒に対する警告があります。  
1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

## 2) 明けの明星

- ・「明けの明星があなたがたの心に昇るまでは」とあります。  
これはやがて起こる主イエス・キリストの再臨を指しています。イエス・キリストこそ、夜明け前にひときわ輝く金星です。主イエスが来られるまで、「暗いところを照らすともしび」としての、聖書のことばに目を留めているようにとペテロは勧めました。
- ・イエス・キリストの初臨 (first coming) は実現しました。旧約聖書時代の多くの預言者たちが語ったことばは、イエス・キリストにあって成就しました。初臨を当時の人々が目撃し確認したように、再臨(second coming)も同じ

ように、みことば通り実現します。

- ・明けの明星であるイエス・キリストが再び来られます。そこに神を信じる聖徒たちのまことの希望があります。

### 3. 神のみことばの本質を知ること

1:20 ただし、聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。

1:21 預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったものです。”

- ・「聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではない」とあります。  
ここで書かれている預言とは、終末預言(eschatological prophesy)ではなく、聖書のみことばと理解させていただきます。聖書の解釈は大変大切です。  
それは人がどう理解したか、人がどのように読むか、また先の時流をどのように読むかという解釈の問題ではありません。
- ・21節のみことばにありますように、「預言は、決して人間の意志によってもたらされたものではなく、聖霊に動かされた人たちが神から受けて語ったもの」という理解が大切です。
- ・神は旧約聖書時代、いろいろな時代に人を選び用いられました。その人の性格、賜物、経験、表現力、語彙などを用いられました。しかし、彼らは自分の意志によって語ろうとしたものではありません。「聖霊なる神によって動かされて語った」と、ペテロは述べました。
- ・ここで用いられている「動かされて」とは、ギリシャ語では、海を航行する船が風に吹かれて進むとうニュナンスがあります。船は風の力に対しては無力です。導かれるままに進むしかありません。主導権は風にあります。
- ・ギリシャ語では、「風」も「霊」も同じ単語(pneuma)です。風の力は、主である神にあります。しかし、その風に吹かれて語ったのは、「人」であったところに、聖書のみことばのユニークさがあります。
- ・神からのメッセージは、血の通った人間の人格を介して伝えられました。それは神の配慮です。しかも私たちに分かることばで、私たちに寄り添うことばで、神は希望のことばをお与えくださいました。
- ・人間には欠点や不足があります。  
この書簡の著者ペテロはどうでしょうか。私たちが聖書から知るかぎり、ペテロは欠けだらけでした。荒削りで、何度も失敗も失敗し、何度も主から諫めら

れた人物でした。そればかりか、主を否むことさえしてしまいました。

- ・しかし神は、そのような欠けだらけの「人」をお用いくださいました。そして真理を明らかにしてくださいました。その場合、私たちは人間の欠けの面をことさらに見つめる必要はありません。神が彼の人格を介し、彼の人生を通して、何を語られたにかを見つめるのです。
- ・この視点は、神のことばが説き明かされる説教をどう聞くかにも関係してくるでしょう。私たちは教会に人を見るために来るものではありません。神がそのような欠けだらけの人間を通して、示してくださる真理に目を凝らすべきです。ですから人が全面に出てはいけません。そこでお語りくださる神の声を真摯に聞き取ることです。
- ・そして、そのみことばが信仰によって、私たち自身にしっかりと結びつけられる必要があります。みことばの光にしっかりと目を留めて、希望を失うことなく、そしてみことばに支えられて歩んでいきたいものです。

## ま と め

主 題：「みことばの光に目を留めよう」

—祝福の人生—

- ・今日も、主は私たちにお語りくださいました。  
ペテロは苦しみと試練中にある聖徒に、幸いなことばを贈りました。  
神のことばは今日も生きており、力があり、そしていのちを与えてくれるものです。そこで私は、今日のメッセージのまとめとして、19節をお読みしたいと思います。
- 1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。

\* God bless you !